

800年前の涙

平安時代末期の英雄、源義経。実は奥州平泉で死んでおらず、蝦夷地・北海道に逃げ延びていた――。

そんな義経北行伝説は、道内各地に数多く残っています。その舞台の一つが、石狩市にもあります。ルーラン海岸（厚田区安瀬）の「義経の涙岩」。「アモイの洞門」と呼ばれる岩に穿たれた洞穴の上にある、こぼれ落ちそうな岩です。

この岩は、かつては国道から見える観光スポットでした。しかし2003年、新しいトンネルの開

通によって道路が切り替えられ、旧道の両端は古いトンネルがコンクリートで塞がれてしまいました。海岸は海中から垂直な崖が立ち上がっているため、歩くこともできません。ルーラン海岸は幻の海岸となっていました。

源平の合戦で大活躍を見せた義経。しかし兄・源頼朝との仲違いから一転、追われる身となり、1189年、奥州征伐により平泉（岩手県）で自害――と思われていたが

実は生き延びて蝦夷地に渡った、というのが北行伝説です。積丹半島をまわり、小舟で日本海沿いを北上してきた義経は、海岸から突き出た岩に洞穴を見つけ、舟を休めます。そして残っていた愛する女性、静御前を思つて涙しました。その洞門にあるのが、義経の涙岩です。

伝説の地に、なんとか陸路から行けないものか。山腹には復元された旧道、濃昼山道があります。地形図をよく見ると、山道の途中から沢に入り、流れを下つて行けば、涙岩の目の前に出られることが分かりました。ちょうど展示パネルを作るために写真が必要だったこともあり、思い切ってチャレンジしました。

図上では簡単でも、実際に歩くのは大変です。人がすれ違うのもやっとなくらいにの山道を2時間以上歩いた後、沢をジャブジャブと下つていきます。時には藪をかき分け、地形図に載っていない滝をずぶぬれになつて越えて。歩き始めて4時間半、とうとう海岸に到達しました。目の前の海に突き出た水冷破砕岩には、ちょうど小舟が入れるくらいの洞穴。義経の涙岩は、今もひっそりと佇んでいました。

訪れる人も絶えたこの岩を見ていると、800年前の英雄の伝説も、本当かも……と思えてきました。（志賀健司）



地図に載っていない滝がいくつも出現し、行く手を遮ります



濃昼山道から沢へ

※沢登りに馴れていないと非常に危険です



石狩市学芸員
志賀 健司 Kenji Shiga

専門は地質学・漂着物理学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

間文化財課 いしかり砂丘の風資料館 ☎62・3711

ERIS 「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ (<http://www.i-eris.tv/>) でもご覧いただけます。